

「ダルマ」に関する最新の研究成果（１）

桂 紹隆

（龍谷大学文学部教授）

【キーワード】ダルマ、ダルマシャーストラ、仏教、ジャイナ教、インド哲学、インド医学、叙事詩

アジア仏教文化研究センターのユニット1は、南アジア諸国に置ける仏教文化の多様性とその現代的意味の追求を研究課題とし、そのサブユニット1は主としてインド亜大陸における伝統的な仏教思想を研究対象としている。2010年度には、仏教の発祥地であるインドにおいて宗教の相違を超えて最も重要かつ共通の理念である「ダルマ」の研究に取り組んで来た。「ダルマ」に関する最新の研究成果として、Yale大学のPhyllis granoffが編集する*Journal of Indian Philosophy*のダルマ特集号(32巻5-6号, 2004年)があげられる。ダルマ研究者として知られるテキサス大学のPatrick Olivelleが責任編集者となり、世界の主要なインド学者、仏教学者が「ダルマ」に関して書いた論文を集めたものである。全460ページの大部なものである。ここには「ダルマ」研究の最新かつ最高の研究成果が集められていると言っても過言ではない。したがって、サブユニット1(伝統思想班)の研究遂行に資するために、東京学芸大学研究員の小林久泰氏に個々の論文の概要をまとめてもらった。同特集号には、Olivelleの短いイントロダクションを別にして、全部で17編の論考がおさめられているが、そのうち10編の概要をここに提示する。残りの7編の概要は来年度の課題とする。(桂 紹隆)

要約一覧

- (1) Paul Horsch (チューリッヒ大学) "From Creation Myth to World Law: The Early History of Dharma" (創造神話から世界秩序へ：初期のダルマの歴史) "Vom Schöpfungsmythos zum Weltgesetz" (Asiatische Studien: Zeitschrift der Schweizerischen Gesellschaft für Asiankunde, vol. 21, Francke: 1967, pp. 31–61)のJarrod L. Whitakerによる英訳。JIPh pp. 423-448
- (2) Rupert Gethin (ブリストル大学教授) "He Who Sees Dhamma Sees Dhammas: Dhamma in Early Buddhism" (ダンマを見る者は諸々のダンマを見る：初期仏教におけるダンマ) JIPh pp. 513-542
- (3) Collett Cox (ワシントン大学教授) "From Category to Ontology: The Changing Role of dharma in Sarvāstivāda Abhidharma" (範疇論から存在論へ：説一切有部におけるダルマの役割の変遷) JIPh pp. 543-597
- (4) Olle Qvarnström (ルンド大学教授) "Dharma in Jainism – A Preliminary Survey" (ジャイナ教におけるダルマ：予備的考察) JIPh pp. 599-610

- (5) John Brockington (エディンバラ大学教授) "The Concept of Dharma in the Rāmāyaṇa" (ラーマヤナにおけるダルマの概念) JIPh pp. 655-670
- (6) Johannes Bronkhorst (ローザンヌ大学教授) "Some Uses of Dharma in Classical Indian Philosophy" (古典インド哲学におけるダルマの用例) JIPh pp. 733-750
- (7) Francis X. Clooney, S.J. (ハーヴァード大学教授) "Pragmatism and Anti-Essentialism in the Construction of Dharma in Mīmāṃsāsūtras 7.1.1-12" (ミーマーンサー・スートラ 7.1.1-12 に見られるダルマの構築における実用主義と反本質主義) JIPh pp. 751-768
- (8) Sheldon Pollock (コロンビア大学教授) "The Meaning of dharma and the Relationship of the Two Mīmāṃsās: Appayya Dīkṣita's 'Discourse on the Refutation of a Unified Knowledge System of Pūrvamīmāṃsā and Uttaramīmāṃsā'" (ダルマの意味と二つのミーマーンサー学派間の関係：アッパヤ・ディークシタ著「プールヴァ・ミーマーンサーとウッタラ・ミーマーンサーの統一的な知識体系を否定する小論」) JIPh pp. 769-811
- (9) Donald R. Davis, Jr. (ウィスコンシン大学マディソン校准教授) "Dharma in Practice: Ācāra and Authority in Medieval Dharmaśāstra" (実践的なダルマ：中世ダルマ文献におけるアーチャーラと権威) JIPPh pp. 813-830
- (10) Dominik Wujastyk (ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン大学教授) "Medicine and Dharma" (医学とダルマ) JIPh pp. 831-842

論文要約

(1) Paul Horsch (Translated by Jarrod L. Whitaker) "From Creation Myth to World Law: The Early History of Dharma" *Journal of Indian Philosophy* 32, pp. 423-448, 2004. (Originally published as 'Vom Schöpfungsmythos zum Weltgesetz', in *Asiatische Studien: Zeitschrift der Schweizerischen Gesellschaft für Asiankunde*, vol. 21 (Francke: 1967): 31-61.)

本稿で Horsch はヴェーダの時代から仏教に至るまでのダルマという概念の歴史を概観している。Horsch の論点は以下の七点に要約される。

1. dhárman という概念の起源は、天と地を分けて持ち (vi-dhṛ) 支える (dhṛ) という創造神話にある。それにより、秩序や「支え」が混沌とした原始の画一から生まれた。
2. 従って、dhárman の元々の意味は、「支柱」(prop, Halt)「支え」(support, Stütze) である。それは「保つ」「維持する」というニュアンスを持つ、より古い文章に相応する。ま

た、それは宇宙論的、儀礼的、倫理、社会的レベルで採用される。

3. 初期には、超自然的な独立した力としての *dhárman* は、神話の上での、特定の神々が備える「支え」(support) という働きであった。それが宇宙の「維持」(maintenance)、安定、恒常性という普遍的原理となる。このことは具体的な神話上の観念が抽象的な概念「法則」(law) へと意味的に発展したことの説明となる。

4. このような意味の移行、拡張は、主に倫理、社会的な範囲で起こるが、それは動作名詞である *dhárman* が抽象概念である *dhármaḥ* へと変化したことに伴う。そしてその移行は *Atharvaveda* に最初に見られる。

5. プラーフマナの時代以来、自然法や倫理上の法律を含む世界の法則が、徐々に、異なるカーストや人生の段階の多様な「権利」や「義務」へと細分化されていく。そしてそれが膨大な量の *Dharmaśāstra*、正義やモラルを扱ったヒンドゥーの文献へと受け継がれていった。

6. 仏教では、「世界の法則」としてのダルマは最高の原理へとその地位を高める。現在科学で自然界の永遠の法則の知識が自然を支配するためのものとなっているのと同じように、ダルマの知識、すなわち、世界の出来事や人間存在の法則に従うことについての知識は解脱のための前提条件である。従って、ダルマは救済の法を含んでいる。

7. 抽象的な世界法則は、世界の作り手、支配者である神や絶対的な世界の基盤の位置を占める。そしてそれは複数の存在の具体的要素に分析される。このような仏教独自のダルマという語の使用にも前置きとなるバラモン教の段階と並行したバラモン教の議論とがあった。

(2) Rupert Gethin “He Who Sees Dhamma Sees Dhammas: Dhamma in Early Buddhism” *Journal of Indian Philosophy* 32, pp. 513-542, 2004.

本稿において、Gethin は初期仏教、特に、ニカーヤ、アーガマ、初期アビダルマ文献に見られるダルマの概念を考察している。特に *Mahāsatipaṭṭhāna Sutta* に見られる「[修行者は] 諸々のダルマを諸々のダルマとして見つち住する」(*dhammesu dhammānupassī viharati*) という表現の中の複数形で用いられるダルマが意味するものが五蘊や十二処などの「心理的、物質的な基本的性質」(basic qualities, both mental and physical) であることを明らかにしている。

まず Gethin は仏教におけるダルマに関する様々な先行研究のうち、以下の3つを解説を行っている。

・ Magdelene & Wilhelm Geiger, *Pāli Dhamma vornehmlich in der kanonischen Literatur*, 1920.

・ Stcherbatsky, *The Central Conception of Buddhism and the Meaning of the Word 'dharma'*, 1923.

・ John Ross Carter, *Dhamma: Western Academic and Sinhalese Buddhist Interpretations*, 1978.

そしてこれらの先行研究に基づいて、ダルマの基本的な意味が次の6つであるとする。

(1) 「教え」 ('teaching')

(2) 「善い行い」 ('good conduct or behaviour')

(3) 「真理」 ('truth')

(4) 「性質」 ('nature')

(5) 「自然法」 ('natural law')

(6) 「心理的、物質的な状態やもの」 ('mental or physical state or thing')

Gethin は上記の意味で用いられるダルマの用例が実際に文献に跡づけられるか、それぞれニカーヤ文献に照らし合わせる作業を行い、現在の研究者によく見られる (5) の意味でのダルマ理解について疑念を提示している。すなわち、Gethin は (5) の意味でのダルマ理解について、そのように理解することは可能であるが、必ずそう理解しなければならない具体的な文例が見あたらないことを指摘している。

さらに Gethin は、(6) の意味で用いられているダルマが複数形で提示されていることに着目しつつ、複数形のダルマが具体的に何を指し示すのか不明瞭であることを指摘している。この六番目の意味はどのようにして生まれたのかという問題意識のもと、Gethin は、ブッダの「教え」という意味からこのような複数形でのダルマの意味が派生したとする Gombrich の説を批判している。Gethin の論点をまとめると、次のようになる。仏教以前に元々、「基本的本質」という意味でダルマが用いられる土壌がインドにあり、それはヴェーダ聖典などに見られる *dharman* の用例に跡づけられる。このことを Gethin は、ニヤーヤ学派やヴァイシェシカ学派における「属性」という意味でのダルマ理解がヴェーダやブラーフマナ文献に遡るとする Halbfass らの分析を参考に、その分析が初期仏教にも当てはまるとして正当化している。

(3) Collett Cox “From Category to Ontology: The Changing Role of dharma in Sarvāstivāda Abhidharma” *Journal of Indian Philosophy* 32, pp. 543-597, 2004.

冒頭において Cox は、dharma という語が様々な意味を持つため、それを理解すること、翻訳することがいかに困難であるかを指摘しつつ、本稿における自身の問題意識が次の二点にあることを示している。それは、まず、(1) アビダルマ、特に説一切有部の文献でどのようにダルマという語が使用されているか、そして、(2) ダルマとそれを説明するために用いられる bhāva, svabhāva, dravya, svalakṣaṇa という語の関係がどのようなものであるか、ということである。

1 dharma という語の基本的意味は何か (A fundamental sense of the term dharma?)

本章で Cox は、ダルマの意味やその起源に関する先行研究を紹介している。それを簡潔にまとめると次のようになる。

(1) Bronkhorst 説：仏陀の説いた「教え」(teaching) からその重要な部分を抽出した「要素」(element) がダルマであるとする。

(2) 平川説：個別的「要素」(factor) という仏教徒のダルマ理解は非仏教徒のものと異なるが、真理 (truth) が持続する性質を持つという点では関連しているとする。

(3) Horner 説：事物の本性 (natural state or condition)、法則 (law)、その正しいあり方などという意味があるので、ダルマは真理 (truth)、仏教教義をも意味するとする。

(4) Halbfass 説：「保持する」(upholding) というダルマの語源的意味はヴェーダにおける「開放の存在論」(ontology of openness) と関連しているとする。

(5) 桜部説：「保持する」(upholding) というダルマの語源的意味から、基準、美德、真理、仏教教義という意味が導かれるとする。ダルマは、個別的なものや本質を示すよりも、むしろ複合的な因果のネットワークを構成するものとして考えられるべきであることを強調する。

(6) Gethin 説：単数形で用いられる dharma と複数形で用いられる dharmas の用例を検討し、パーリの文献の中で用いられるダルマの意味から説一切有部などで用いられるダルマの意味に直接移行し得ないと指摘。特に、パーリ文献でのダルマの意味は静的なものではなく、むしろ動的なものであることを指摘している。

(7) Warder 説：ヴェーダ聖典とニカーヤに見られるダルマという語の用例を比較検討し、両者に見られるダルマという語が、何か恒常的な状態を意味するのではなく、世界を一定不変に維持する動的な力を意味する点で共通していることを明らかにしている。

2 それぞれの伝統間の文脈 (The inter-traditional context)

本章で Cox は、異なる学派間で共通の術語が採用されていることから、仏教内部だけでダルマの意味を解明することの危険性を説いている。その例として Cox は、文法学派パタンジャリの「実体」(dravya) という語の使用が、サーンキヤ学派、ヴァイシェーシカ学派、ジャイナ教、仏教における使用と類似している点を指摘している。これは、すなわち、「実体」という語そのものに「個別的な対象」と「属性の集合体」という二つの意味が含意されているという共通の土壌が既に成立していることを示唆している。

3 ダルマ分析の目的 (The purpose of “dharmic” analysis)

本章で Cox は、初期仏教と説一切有部における「ダルマの識別」(dharmapracaya) という概念を検討することで、そこに二つの救済論的な意図が見られることを指摘している。ひとつは、価値評価型の分析 (“evaluative” analysis) によって、これは解脱にとって有益なものであり、これはそうではないと弁別することであり、もうひとつは、叙述型の分析 (“descriptive” analysis) によって、日常経験の隠された真実のあり方を明らかにし、煩惱の対象となるものを退けることである。

4 カテゴリー化としてのダルマ分析 (“Dharmic” analysis as categorization)

本章で Cox は、仏教においてダルマがどのように分類されてきたかをまとめている。特に、説一切有部が「五位」という新たな分類を導入し、その分類がこれまでの分類とどのように対応するかを説明している。

無為というカテゴリー (The category of the unconditioned)

5 本章で Cox は、五位の分類において新たに追加されたカテゴリーの一つ、無為を検討することで、説一切有部におけるダルマ理解の解明を試みている。特に無為のダルマの一つ、虚空についての Mahāvibhāṣā に見られる議論をもとに、生産的活動を行わない無為のダルマであっても、増上縁、[無力] 能作因、所縁縁として機能し、何かしらのハタラキを持ち得ることを明らかにしている。またこのような説一切有部のダルマ理解が先行研究に見られる動的なものとしてのダルマ理解と矛盾しないことを指摘している。

6 svabhāva と包摂という方法 (Svabhāva and the method of inclusion)

本章で Cox は、ダルマを特定化し、分類するための基準となる自性 (svabhāva) とその分類の方法である包摂 (saṃgraha) について詳細な解説を与えている。また自性が各々の個別的ダルマとカテゴリーとしてのダルマ群の両方に適用されることに触れ、このような適用の曖昧さは、自性が別々のカテゴリーを区別する基準を示すものとして理解される限り

で、問題とならないことを指摘している。

7 bhāva との関連における svabhāva (Svabhāva in relation to bhāva)

本章で Cox は、svabhāva という概念をさらに理解するため、bhāva という語の用例を Kathāvatthu をはじめとするいくつかの文献に求め、その意味が「本質」(nature) という抽象的なものと「存在形態」(mode of existence) という存在論的なものの二つに集約されることを指摘している。そして、元来は見た目上、同じ意味で用いられてきた svabhāva と bhāva という語が、時代を経るに従って、前者が説一切有部に見られる「自性」を意味するようになり、後者がダルマが変化する「存在形態」という専門的な意味を獲得したと結論している。

8 実体的存在の目印としての dravya (Dravya as the marker of real existence)

本章で Cox は、dravya という概念をもとに存在論的観点からダルマの解明を試みている。存在には、実体的存在 (dravya)、暫定的存在 (prajñapti)、相対的存在 (āpekṣika) の三種があるが、ダルマはそのうち実体的存在とみなされる。また、アビダルマにおいて実体として存在するとは、何らかの因果効力を持つことであるとし、因果効力を発揮するものとしてのダルマを三世実有論と関連させながら解説している。

9 svalakṣaṇa と認識論的移行 (Svalakṣaṇa and the epistemological shift)

本章で Cox は、svalakṣaṇa という概念をもとに認識論的観点からダルマの解明を試みている。特にサンガバドラの「認識を生み出す対象であることが存在の真実の特質である」という存在の定義を検討することを通じて、アビダルマの分析哲学が自性 (svabhāva) に基づくそれまでのカテゴリーを基礎に置く抽象的な存在論から、相 (lakṣaṇa) に基づく認識論的な存在論へと移行していった様子を解説している。

(4) Olle Qvarnström “Dharma in Jainism – A Preliminary Survey” *Journal of Indian Philosophy* 32, pp. 599-610, 2004.

Qvarnström は、冒頭で、サンスクリットで文献が著されるようになったジャイナ教の最初期には、ダルマがほぼ「教義」(teaching) を指示していたこと、一方で、「運動の原理」(dharma)、「停止の原理」(adharmā) というジャイナ教独自の存在論に基づくダルマ理解も後期聖典期 (200-300 CE) には定着していたことを指摘している。

続いて、Qvarnström は、ジャイナ教に見られるダルマという語の様々な用例のうち、

特に相互に関連性が見られる3つの用例を選び、その解説を行う。それは以下の3つである。

(1) 善い行い (virtuous behaviour) としてのダルマ

(2) 本質に合致した行い (behaviour in accordance with intrinsic nature) としてのダルマ

(3) 宇宙的秩序 (cosmic order) としてのダルマ

これらのうち、(1) は、在家者と出家者それぞれの宗教的、社会的行いに関する倫理 (ethics) と言える。次に (2) は恒常な人格主体であるジーヴァの概念と関連したものである。この2つのダルマ理解は、次第に統合していき、ジャイナ教独特の、人の本質と調和した行いとしての正しい行い (samyakcāritra) の定義を形成していく。

なお、この定義に基づいて、ダルマは二種と理解される。ひとつは活動 (activity) を特質とする行い (pravṛttidharma) であり、もうひとつは非活動 (non-activity) と特質とする行い (nivṛttidharma) である。前者は徳 (punya) や享楽 (bhoga) を結果するものであり、後者は解脱を結果するものである。

Qvarnström は、最終的に、(2) のダルマ理解がさらに発展していき、あらゆる活動を決定する (3) の宇宙的な秩序としてのダルマ理解が生まれたと示唆的に解説している。

(5) John Brockington “The Concept of Dharma in the Rāmāyaṇa” *Journal of Indian Philosophy* 32, pp. 655-670, 2004.

本稿において、Brockington はラーマヤナに見られるダルマの概念を検討することにより、ダルマの意味の特殊なニュアンスが、数世紀にも渡る伝承の過程でいかに変化してきたかを考察している。

近年の研究において、James Fitzgerald は、マハーバーラタの中で、行為 (action) の概念と結びついた古いダルマの意味がより新しいもの、すなわち、ヨーガ起源の自己浄化のための倫理に移行していったことを指摘している。これに対して、本稿で Brockington は、まず、ラーマヤナにおいては、全体的に古いパターンのダルマ、すなわち行為の概念と結びついたダルマが見られ、不殺生 (ahimsā) などのより新しい価値観についての言及がほぼないことを指摘している。

また、Brockington は、ラーマヤナにあらわれる大部分のダルマが礼節や道義を示す一方、そこには、王の義務 (rājadharma) と同じく、カースト、家族や個人的義務、および、必然性の要素 (element of necessity) に対する強調も見られるということも明らかに

している。

Brockington は、ラーマヤナにおけるダルマの意味の変化を次のように三つの段階に分けて分析している。

まず、ラーマヤナの第一拡張期では、英雄的なストーリーが顕著であり、宗教的な基調は、プラーナのものよりもヴェーダのものに近い。そこで見られるダルマは、多くの場合、現在の地位を維持していくというクシャトリア的な観点からのものであった。

続く第二拡張期では、英雄的なものから美的なものへと移行していくが、それと同時に、ある程度、宗教的問題にも重点が置かれるようになる。そして徐々にダルマが倫理的振る舞いという点から理解されるようになる。

さらに第三拡張期には、ラーマの行いそのものがダルマを代表するものとして描かれるようになる。しかし、この最終的な段階に至っても、第一の重点は行為 (action) に置かれている。この理由を Brockington は、ダルマの理解は単なる抽象的で非個人的なものではなく、内的な葛藤が常に最小限、ほのめかされているからであると考察している。

(6) Johannes Bronkhorst “Some Uses of Dharma in Classical Indian Philosophy” *Journal of Indian Philosophy* 32, pp. 733-750, 2004.

Bronkhorst は本稿において仏教的な意味でダルマという語が用いられるようになった仕方とヴァイシェシカ学派に見られるようなバラモン的なダルマの概念の発展を解説している。

まずはじめに、アビダルマに見られるような仏教的な意味でのダルマという語が用いられるようになった過程を Bronkhorst は次のようにまとめている。すなわち、受け継がれてきたブッダの「教え」が秩序立てて整理され、そのように集められた「項目」があらゆる「存在の究極的な構成要素」としての地位へと昇華させられた、と。また Bronkhorst は、説一切有部に見られるような、ダルマを究極的な存在とする考え方を仏教における無我の思想に跡づけられると論じる。すなわち、人格主体など存在せず、究極的に存在するのはその構成要素であるダルマであるという発想である。さらに Bronkhorst は、このような存在の構成要素としてのダルマ理解は、一方で、その存在の構成要素を否定していくという後の仏教の哲学的発展にも大いに寄与してきたことを指摘している。

次に、Bronkhorst はヴァイシェシカ学派に見られるダルマの概念を詳細に検討していく。Vaiśeṣikasūtra が「ダルマを教示しよう」(athāto dharmam vyākhyāsyāmaḥ) という一文

から始まることから分かるように、ヴァイシェーシカ学派の教義においてダルマは非常に根本的な役割を担う。ヴァイシェーシカ学派においてダルマは基本的にアートマンの属性のひとつとして扱われる。しかし、その一方でそのようなアートマンの属性としてのダルマとは違う意味で用いられる場合もある。例えば、Padārthadharmasaṅgraha において、解脱をもたらす真理の知 (tattvajñāna) の原因として扱われるダルマがそれである。そこでダルマは「主宰神の教令によって明らかにされるもの」(īśvaracodanābhivyaakta) として扱われている。Bronkhorst は、この Padārthadharmasaṅgraha におけるダルマの用例が、ミーマーンサー学派のダルマの用例 (Mīmāṃsāsūtra 1.1.2: codanālakṣaṇo 'rtho dharmah) と極めて類似している点に着目し、両学派におけるダルマの用例を検討していく。その結果、初期には英語の 'virtue, merit, appropriateness' などに対応するような一般的意味で用いられてきたダルマが、時代を経るにつれ、それぞれの学派における存在論的関心から異なる意味へと転換していったと Bronkhorst は最終的に分析している。

(7) Francis X. Clooney, S.J. "Pragmatism and Anti-Essentialism in the Construction of Dharma in Mīmāṃsāsūtras 7.1.1-12" *Journal of Indian Philosophy* 32, pp. 751-768, 2004.

本稿において、Clooney は、祭式における供物の代替 (atideśa) を扱ったミーマーンサー・スートラ 7.1.1-12 を検討することでミーマーンサー学派にとっての dharma の概念を考察している。

Clooney は、ミーマーンサー・スートラ 7.1 における議論を次のようにまとめる。諸々のもの (things)、行為 (actions)、人 (persons) が、それぞれ適切に配置されたとき、それらは本来の供犠 (archetypal sacrifice) の成就に寄与し、そうすることで、それらはダルマの地位を得る。また、そのようなダルマは他の供犠に変換することが可能である。ただし、それは、変換される供犠も教令的なことばの力 (codanā, injunctive verbal force) によって生み出される場合に限り、単に本来の供犠と類似しているという考えによる場合にはそうではない。この妥当性は、祭式行為を引き起こすヴェーダの指示によって生み出され、他の種類の知識や、さらにはヴェーダに見られる供犠の実践例からの推定によっては生み出されない。

このような分析を経て、Clooney は、ミーマーンサー学派におけるダルマが、何らかの知られるべきものではなく、むしろ、ヴェーダにおいて聞かれ、思慮深く実行されるべき法規 (enactment) であると指摘する。

しかし、このような「知られるべきものではない」というダルマ理解は、
‘codanālakṣaṇārtho dharmah’ というミーマーンサー・スートラ 1.1.2 におけるダルマの概念
とどのように整合するのか。この問題意識のもと、さらに議論を進め、最終的に Clooney
は、バーツタ派において、ダルマがある種の知られるべき本質 (knowable essence) とし
て再構築されていたのではないかと推測している。

(8) Sheldon Pollock “The Meaning of dharma and the Relationship of the Two Mīmāṃsās:
Appayya Dīkṣita’s ‘Discourse on the Refutation of a Unified Knowledge System of Pūrvamīmāṃsā
and Uttaramīmāṃsā’” *Journal of Indian Philosophy* 32, pp. 769-811, 2004.

本稿で Pollock は、16 世紀後半に活躍したヴェーダーンタ学派の思想家 Appaya
Dīkṣita の著作 Pūrvottaramīmāṃsāvādanakṣatramālā 全体のサンスクリットテキスト及びその
英訳を提示している。

ミーマーンサー学派とヴェーダーンタ学派はともにヴェーダ聖典を権威とし、その解釈
学を出発点としてそれぞれの学問体系を構築した。前者は前期ミーマーンサー

(pūrvamīmāṃsā)、後者は後期ミーマーンサー (uttaramīmāṃsā) と呼ばれる。Pollack
は、「前期」から「後期」への移行を Brahmasūtra に対する Rāmānuja 注などをもとに、
dharma への関心 (athāto dharmajijñāsā) から brahma への関心 (athāto brahmajijñāsā) への
移行と分析する。では、dharma と brahma とはどのような関係にあるのか。そのような問
題意識から、Pollack は Appaya Dīkṣita の記述にその解決の糸口を求めている。

Pūrvottaramīmāṃsāvādanakṣatramālā において Appaya Dīkṣita は、ミーマーンサー学派の
根本教典 Mīmāṃsāsūtra の冒頭の dharma という語で示すものに brahma が含まれるのか、
それとも祭式行為 (karma) だけが含まれるのかを問題とし、dharma の考察と brahma の
考察は同じものではないことを論証している。Appaya Dīkṣita によれば、Mīmāṃsāsūtra 冒
頭における dharma とは、その果報が恒常ではなく限定的なものであり、その点で brahma
とは全く異なるものである。

(9) Donald R. Davis, Jr. “Dharma in Practice: Ācāra and Authority in Medieval Dharmaśāstra”
Journal of Indian Philosophy 32, pp. 813-830, 2004.

本稿において、Davis, Jr. はダルマ文献に見られる dharma の概念とその源泉とされる
ācāra の概念を検討し、その関係性について考察している。特に、Lariviere (1997; 1998) や

Wezler (1999)などの従来の研究において、*ācāra* という語が「習慣」(custom) という曖昧なことばで訳されてきたことを問題視し、*ācāra* がそもそもどのようなものであるのか、その解明を目指している。

Davis, Jr.はまず、中世ダルマ文献に見られる際だった特徴のひとつが *dharma* の権威に関する同語反復的な性格にあることを指摘する。すなわち、*dharma* が、権威を持った人々によって制定、普及されるのと同時に、彼らの権威は *dharma* に従っていること、*dharma* を知っていることで保証されるというものである。

Davis, Jr.はさらに、*ācāra* という語がどのように言い換えられているかを検討し、それぞれの語の意味を分析している。

・「慣習」グループ

samaya (慣習、convention)

āgama (伝統、tradition)

vyavahāra (日常活動、daily business)

lokasaṃgraha (世間の人によって受け入れられていること、accepted by people)

・「*dharma* の実践」グループ

śīla (傾向性、character)

anuṣṭhāna (実行、performance)

このような分析を通じて、Davis, Jr.は、中世ダルマ文献に見られる *ācāra* という語が単に「習慣」という意味だけではなく、「*dharma* の実践」という意味で用いられていることを証明している。

最終的に、Davis, Jr.は、*dharma* と *ācāra* が互いに一方がもう一方の源泉を循環的に構成していることを確認しつつ、*dharma* やその権威を *ācāra* との関係なしに理解することの危険性を指摘している。

(10) Dominik Wujastyk “Medicine and Dharma” *Journal of Indian Philosophy* 32, pp. 831-842, 2004.

本稿で Wujastyk は、インドの医学文献に基づき、人間が善く生きるために欠かせないものである、宗教的・道徳的規範であるダルマと医学の関係を考察している。

病気の治療と宗教的儀式のどちらが優先されるのか。この問題に対して Wujastyk は、*Carakasamhitā* に見られる「健康はダルマ、アルタ、カーマとモークシャの究極的な根源

である」という記述を例に、病気の治療が宗教的儀式に優先されるべきとされている点を指摘している。

さらに Wujastyk は、薬として動物の肉が使用される例を示しつつ、健康維持のためには肉食すらも古い時代には当然のこととして認められていたことを指摘している。また Wujastyk は、古代インドの菜食主義化が進む中、そのことに異論を唱える者たちもあらわれ、Cakrapāṇi Datta に至ると、医師ではなく、患者の個人的責任において肉を使用した薬の服用が許されるようになるという歴史的な変遷も明らかにしている。

最終的に Wujastyk は、近代以前のインドにおける医学の伝統において、ダルマの達成が医学の直接的な目的とされておらず、健康の達成こそがその第一の目的とされていることを明らかにしている。そしてそのような考え方が、健康がなければ他の人生の目的も達成することが不可能であるという理由に基づいていることを指摘している。